

Q2-22 ダイアフラムを用いないノンダイアフラム柱－はり接合部材の既製品（認定品）を使用した場合、接合方法についての評価はどのようにになりますか？

- ・通しダイアフラム等のダイアフラム形式と同等の剛性を確保し、保有耐力接合を満足することを前提に、当該接合形式の場合、柱とコアとの溶接線が外側に位置することから、その構造方法は関連告示における(い)内ダイアフラム形式（ダイアフラムを落とし込む形式としたものを除く。）以外の形式(ろ)に該当します。詳しくは各々の製品の認定（評定）内容をご確認下さい。

※2：ビルディングレター'09.7抜粋

Q2-23 はりフランジ幅が柱幅より大きい場合、問題はありますか？

- ・このような場合、柱耐力がはり耐力を下回る可能性が高くなり望ましいとは言えませんが、一部分の柱はり接合部で、やむを得ず、はりフランジ幅が柱幅よりも大きくなる場合は、構造全体としての耐震安全性を確認するとともに、加工上の注意が必要です。例えばダイアフラムが大きくなると溶接による変形が大きくなるため、エンドタブ近傍の溶接部に品質上の問題が生じる可能性が高くなり、注意が必要です。

Q2-24 通しダイアフラム形式のB C R柱の低減率は柱 M_{pc} に単純に柱耐力低減率を掛ければよいのですか？

- ・軸力を考慮した柱の全塑性モーメント(M_R)に柱耐力低減率を掛けたものを用います。

Q2-25 建物の階に段差がある場合の設計上の取り扱いはどうするのですか？

- ・下段階の柱頭は、ルート2設計時には最上階として扱い柱はり耐力比の検討は不要です。ルート3設計時には中間階として扱い、崩壊型の判定を行います。詳しくは「2008年版冷間マニュアル」の2.2.4設計の留意点をご参照下さい。